

破来頓等絵巻考

——大谷大学博物館本の紹介をかねて——

國賀 由美子

はじめに

破来頓等絵巻については、国の重要文化財であり一四世紀前半に制作されたとみられる徳川美術館本¹（以下本稿では徳川本と略す）のほか、東京国立博物館に所蔵される狩野晴川院養信の奥書をもつ、養信の門人寿斎、勝溪による天保七年（一八三六）四月の模写本²（同、東博A本）、国立国会図書館に所蔵される旧帝国図書館蔵本の江戸期の模写本³（同、国会図書館本）、そして近代に入って帝室博物館の模写事業で前田氏実³により写された、東京国立博物館蔵の、徳川本の忠実な現状模写本⁴（同、東博B本）が知られている。各本すべて一卷で、詞は四段、絵は三段から成る。なお、箱書きや題箋によるこれらの名称は「破来頓々物語」「破来頓等絵詞」「不留房絵詞」とまちまちであるが、本稿では総称として「破来頓等絵巻」を用いることとする。また「本絵巻」と称する時は、この「破来頓等絵巻」の総称を示すこととする。

1 先行研究では、詞書については、『一遍上人語録』や一遍の法語をまとめた『播州法語集』、時宗二祖他阿真教の

『他阿上人法語』、あるいは「一遍聖絵」や「遊行上人縁起絵」に多くの出典が確認され、時宗の教義が説かれていることが明らかにされている。⁵しかし、絵巻全体としていまだ不分明な点も多い。絵より詞の方が一段多いが、各段の詞と絵の関係性や、各段の内容の有機的つながりも検討を要し、制作企画者や目的なども十分に議論されてきたと言いがたい。

さて、筆者が奉職する大谷大学の博物館にも、一八世紀(江戸時代中〜後期)のものともみられるこの絵巻の模本(同、大谷本)が所蔵されている。本稿では、大谷本の紹介をかねて、「破来頓等絵巻」の伝本関係を整理し、徳川本制作の周辺についても、思いをめぐらせてみたい。

第一章 伝本関係の整理

第一節 大谷本について

大谷本は、本学に博物館がいまだなかった昭和四六年(一九七二)度に、京都の美術商から購入したものである。長く図書館に蔵されてきたが、その後平成一五年(二〇〇三)に博物館が開館し移管されている。なお本学購入以前の伝来については未詳である。まずは大谷本について、徳川本と比較しながら、その概要を見てゆきたい。

大谷本は卷子装一巻、紙本著色、着衣や水の流れなど、とくに濃彩の部分もある。表紙は金襴地であり、縹色の糸に、金糸で雲渦に鳥の文様を織り込む。紙本地の題箋(図1)には切箔が使用され、また金泥で打雲のような文様があしらわれていたようであるが、今となつては判然としない。「破来頓等物語」と墨書されるが、これは徳川本の題箋(図2)と同じ文言で、書体も徳川本を真似たかのように近いものである。なお徳川本の題箋は、本文とは異なる手跡であることが指摘される。⁶大谷本は、見返しは紙本で切箔散し。本紙は、紙継の状態や法量は文末の



図2、徳川本 題箋
「破来頓等絵巻」徳川美術館蔵



図3、大谷本 題箋

法量表のとおりである。奥書はなく、制作に関する記述も見られないが、着彩や筆法などから一八世紀の作と考えてよいと思われる。詞と絵は料紙を分かち、それぞれ分担制作したことが推し量られる。料紙は筆写の後は詞も絵も、間断なく望ましい位置で裁断されている。徳川本についても同様であるが、徳川本は第一段の絵の後だけ、かなり長い余白を残したまま継がれている。これは画中詩の途中で紙が終わり、次の紙に溢れた3行のみを筆写する必要が出たためであろうが、不自然な観は免れえない〔註1山本論文（『金鱗叢書』）掲載の徳川本全図参照〕。

大谷本は箱をともなって伝わり、簡便な棧蓋造のものであるが、蓋表に「破来頓く物語 壹巻」と墨書される（31頁図8参照）。書体は題箋とは全く異なり、隸書体であるが、江戸後期の、つまり制作当初の箱の可能性も高いと思われる。

さて、末尾に掲載したカラー全図、および詞書の対照表を参照しながら詳細についてみてゆきたい。まず、詞書についてであるが、改行の位置などすべて徳川本と大谷本は等しい。さらには変体仮名に採用する字母も、すべて同じ漢字からのくずしである。また、第一段末尾近くで、徳川本が「珠」を「朱」と誤記

して訂正している(詞書対照表□の箇所)のを、大谷本もそのままに写す。徳川本がその行に収まりきらなかった最後の一字を小さく左右横に書き足すのも、大谷本は同様に写している。徳川本の第四段三行〜四行目では、「名号能乃」とあって、衍字となった「能」の字を消しているが、「能」の文字中の二か所に「々」をほどこす特異な消し方(37頁の拡大図参照)もそのとおり写している。

徳川本においては、汚れや痛みが多く、詞は校合した結果か、訂正や文字の挿入などの後筆も多い。これも一人の手になるものではなく、何人かによって書き加えられたと思われる。この絵巻が布教や教説理解のために使用され続けた形跡を強く感じ取ることができる。巻頭は、天地の地の部分の傷みがひどく、詞の各行の末尾が痛んで破損し、行の最後の文字を読み取ることができない。そして大谷本は、徳川本の傷みで欠落した文字は落としたままに筆写している(詞書対照表参照)。このように、大谷本は徳川本の詞書をそっくりそのまま写しているが、それは書体書風にまで及んでいる。

つぎに詞と絵の関係から見て行くと、大谷本が徳川本と異なる特徴としては、まず徳川本の一段目の絵と、二段目の絵が入れ替わっていることが挙げられる。つまり、大谷本は一段の詞の後に徳川本の二段の絵、二段の詞の後に徳川本の一段の絵という順になっている。先行研究を見ると、早くに徳川本を紹介した「破来頓等画巻」(『國華』二九一、一九一四年)において、大谷本と同様の順が示されており、これについて山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」は、「絵の第一段と第二段の順序を取り換え、二段―一段―三段の順に説明している」と指摘する。山本氏の言うように単に順番を取り違えたのか、それとも徳川本は一九一四年当時、大谷本と同じ順序で貼り継がれていたのだろうか。徳川本の修理は昭和五八年(一九八三)十月三日から同五九年六月一日に行われているが、それ以前の修理状況については詳しい記録は残らないようである。山本氏は館蔵の元文五年

(一七四〇)頃から明治初年までの台帳であった「道具帳」をもとに、

藩政時代には、世尊寺経尹筆と伝えられる「筆注自在抄」と共に一緒に収められていたが、明治の末か大正頃に箱が新調され、別々に収納されるようになった。

と、記されるのみである。⁷

山本氏も中村氏も指摘するように、本絵巻は各段の絵の内容ごとに述べられた詞が、それぞれ絵の前に配置されるわけではない。徳川本の第一段の絵については、法体の男性が立派な調度のある家屋敷から肩もあらわに踊り出る様子が描かれ、屋内の妻らしき女性や家人、幼子と犬が悲しげに彼を見送る。詞一段目の「女子どもや 宝は我をつなぐぞと、思い知りなば、何にとまらん」に合致するようであるが、法体の男性は「不留房」とみられ、不留房の名が詞書に初出するのは、第二段の冒頭においてである。さらに第二段の詞中には、「(不留房は)よろずの物に留まらざれば、仏の国に入り侍りぬ」とあって、まさに第一段の絵に対応するものと思われる。⁹ 徳川本第二段目の絵は、固く閉ざされた立派な門のある邸宅内で「名聞家」とされる男性が、「性心子」と注記された鬼に首と両足を繋かれ締め上げられている。傍らの「愛者妻」と注記される鬼は「名聞家」の腕をつかみ上げ、名聞家は財宝を胸に苦しみに顔をゆがめる。一段の詞「就中、われらをとどむる者は名聞の関の戸かたく閉じ、利養のくる木をさしたれば、有体の家にとどまるをや」や、「夢なれば妻にもとどまらじ、首かし(首枷か)なれば子にもとどまらじ、足罌なれば材も家も何もかも、我などどめそ破来頓等」が内容として合致し、先述の「女子どもや 宝は我をつなぐぞと、思い知りなば、何にとまらん」も二段の絵の内容を述べたものとして矛盾はない。逆に第二段の詞「妻子諸財宝身に縛成て、生死に留まりたる躰をみよ」も、徳川本第一段の絵にも第二段の絵にも通じるといえるよう。

図版Web非公開

図3、徳川本 第三段 宝樹下の名号
「破来頓等絵巻」徳川美術館蔵

さらに徳川本のように、主人公の姿が一段で法体、二段で俗体にも、三段でまた法体へと転じるのも、いささか違和感がある。このように、断定できるものではないが、大谷本の絵の順序が原初の形であるともみるのも、あながち退けられるべきではないことを指摘しておきたい。

ついで絵を徳川本と比較すると、徳川本第一段の絵は、上畳の緑青などが剥落するが、大谷本は剥落を写すようなことはしない。徳川本第二段の絵では、小橋の架かる淡彩の流れに水紋はないが、大谷本では群青による濃彩として、この上に胡粉でこれを描き加えている(徳川本二段絵、大谷本一段絵)。徳川本で板葺き屋根の軒から下げられた笹の葉らしきもの三連は、下の一連が擦り落とされているが、大谷本は当初から二連しか描かない。徳川本は水流などを除くと概して濃彩で、大谷本もかなり顔料が盛られる箇所もあるが、この場面の築地塀などを見ると、大谷本は筆線を重視して模されているのがわかる。

第三段の絵は、不留房とみられる法体の人物が紅白の踏割蓮華座に立ち、飛来した金色の阿弥陀仏に相向かう。大谷本は徳川本より不留房も阿弥陀仏も面長で写し崩れとみられるが、両本の表現はほぼ等しい。ただし徳川本の

阿弥陀仏にはかすかに箔足らしきものが見え、金箔を使用していると思われるが、大谷本は金泥による。そしてなぜか、両者の間に記されていた名号が徳川本では消された痕跡があり、大谷本も薄墨で、その消し去った痕跡の残る名号を写している。徳川本では続く極楽浄土の場面の、宝樹の下に名号が記されるが、大谷本はこれを写さない。よく見ると徳川本もいったんは消されていたようだ(図3)。さらに九つの蓮華の上や飛天、楽器、鳥のそれぞれにも、法体人物と阿弥陀仏の間と同様に名号が記されていたが、故意に抹消されており、大谷本はこれらの名号は写さない。

詞においても絵においても、徳川本の虫損跡のカスレや、汚れ、滲みなどまでは写し取っておらず、逆に徳川本の欠損部分を補って描いている部分がある。すなわち、絵について大谷本は徳川本の現状模写ではなく、復元模写といえるだろう。しかし、大谷本は破来頓等絵巻の転写の系統において、明らかに徳川本と系を一にするものと認められる。徳川本を直接に模写した可能性も高いと思われる。

第二節 東博A本、国会図書館本

つぎに、徳川本の現状模写である東博B本はさておき、東博A本、および国会図書館本を徳川本、大谷本と比較し、検討しておきたい。

東博A本は詞書の料紙の最後に「右祐清所持之繪本を以て模写せしむ」天保七年丙申四月 會心齋」の墨書銘がある。また、第一段の絵の前に「寿齋写」、第二段の絵の末尾に「寿齋写之」、第三段の絵の末尾には「勝溪摹」と記される。松原茂「狩野晴川院と絵巻」によると、先述したように狩野晴川院養信の門人寿齋、勝溪による天保七年(一八三六)四月の模写本で、門人だけで模写したのだが、「會心齋」、つまり養信の署名を有している。また、

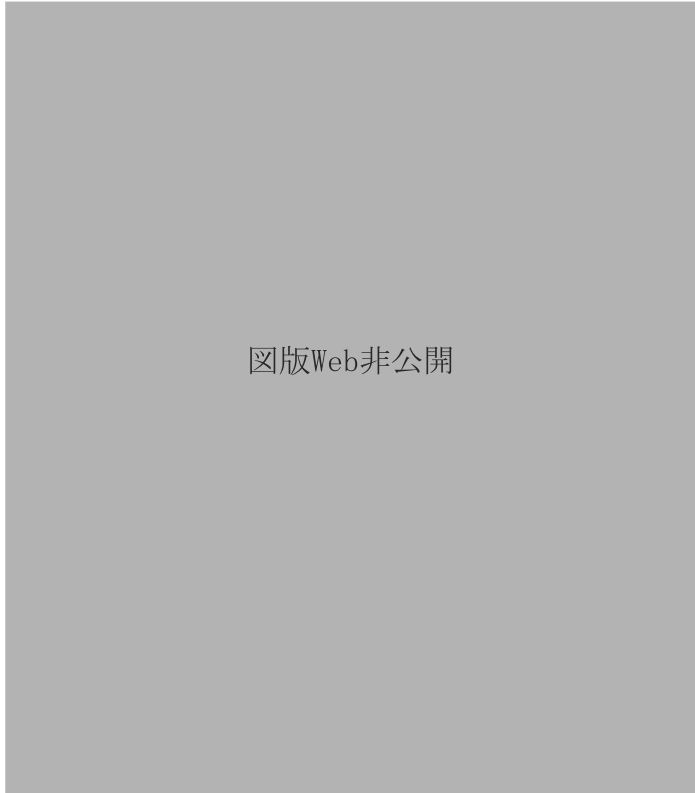


図4、国会図書館本 巻頭 国立国会図書館デジタルコレクションから転載

(狩野) 祐清所持の絵本によった、とあるが、現在東京国立博物館に所蔵される狩野晴川院関連の絵巻模本のなかには、ほかにも「法然上人伝絵残欠」「魔仏一如絵詞」「天皇撰関影」「業兼本三十六歌仙」が、狩野祐清所蔵の模本を写したものと記される¹¹。

狩野祐清邦信(一七八三―一八四〇)は、宗家である中橋狩野家の第一四代。鍛冶橋狩野家の六代探牧守邦の次男として生まれ、初めは探秀と号したが、寛政一〇年(一七九八)に中橋家の婿養子となった。同家には晴川院の弟立信が養子に入っており、祐清と晴川院も親交が厚かったものとみられる。

箱蓋表に「不留房繪詞 惟久筆 壹卷」と墨書され、題箋にも、さらに少し新しいものとは見受けるが、金地に「不留房繪詞」とあって、いずれかの段階から「不留房繪詞」の名称で伝わったものであることを知る。松原氏によ



図5、徳川本 第三段 阿弥陀如来像
「破來頓等繪卷」徳川美術館蔵 © 徳川美術館イメージアーカイブ/
DNPartcom

ると、晴川院の模写は、原本の奥書はもちろんのこと、題箋や添帖、極札にいたるまで、その書風のままに写しとる周到さであったという¹²。しかし絵の方は、大谷本に比べるとかなり淡彩であり、祐清所持本も淡彩のものだったのかもしれない。

国会図書館本も、江戸後期の模本とみられる。「破來頓等繪詞」の題箋をもつが、この題箋は明らかに詞書とは異筆である。東博A本と比べても質素なつくりで、絵は、東博A本と同様に淡彩で写しとられる¹³。

東博A本と国会図書館本は、共通項が多い。詞書対照表のとおりに、改行の位置、変体仮名の字母となる漢字もすべて同じである。そしてこれは、徳川本、大谷本のそれとは大きく異なる。東博A本は巻頭が欠如し、国会図書館本に見る冒頭の9行(図4)が失われて、「留境み那已然堂利」から始まる行が巻頭となっている。東博A本は詞書が始まるところに「此詞書祐清繪本」者^(は)なれて無し」と記されて



 図版Web非公開

図6、国会図書館本 第三段 阿弥陀如来像
国立国会図書館デジタルコレクションから転載

三段絵の阿弥陀如来は金色像にあらわされる(図5、および大谷本全図13~14)が、東博A本と国会図書館本は金色ではなく、淡い朱の衣を着した姿にあらわされる(図6)。巻末は、徳川本は後筆とされる「南無阿弥陀佛々々々々々々」¹⁴と二度繰り返し返した後に、別紙に「相傳阿弥」とあり、大谷本もこれを踏襲して写している。一方の東博A本と国会図書館本は、「南無阿弥陀仏」で筆を擱く(図7)。そして詞書の書体書風も東博A本と国会図書館本は同様に筆写されるが、これは徳川本・大谷本のそれとは全く異なるものである。

おり、失われた9行は祐清所蔵本にも既に無く、その巻頭一紙分であったとみられる。国会図書館本にはこの部分の詞書があるので、祐清所蔵本とは別の、徳川本・大谷本とは系の異なる、祐清本と同一系統の一本からの転写とみられる。さらに、徳川本・大谷本では画中詩となつている「あら、をこ可満しや(中略)家能犬可や、破来頓等々々々々」が、東博A本と国会図書館本は第一段詞書の末尾に記される。徳川本・大谷本では第



図7、国会図書館本 巻末 国立国会図書館
デジタルコレクションから転載

以上のことから、現在伝わる「破来頓等絵巻」には、徳川本・大谷本、そして東博A本・国会図書館本の二系統があることが明瞭である。そして、この中で最も早い時期に成立した徳川本自体も、この絵巻のいわゆる原本ではないとみられており、もとは掛幅装であったものが卷子装に形を変え転写されたものではないかとの意見もある¹⁵。次章では、内容の検討を通して、この絵巻の成立について考えてみたい。

第二章 「破来頓等絵巻」の成立

第一節 絵と詞、成立の背景

さて、本絵巻徳川本は、江戸時代には、詞は世尊寺家第一二代の行尹（一二八六～一三五〇）筆と伝承されていたことが、享保七年（一七二二）の古筆了音による「極札」や、尾張徳川家の二種の「道具帳」、註7の「記録帳」、前

記した箱書などから知ることができ。少なくとも一四世紀前半の世尊寺流の手になることは、山本泰一氏も認めるところであったが¹⁷、近年、橋本貴朗氏の一連の研究によって、世尊寺家による絵巻物詞書ほか書法の解明が進展した¹⁸。同氏によると、南北朝、室町期の当家の秘説を記した一一代行房の

『石筆条々』、一六代行高の『世尊寺侍従行季二十ヶ条追加』、行房、行尹兄弟から伝授された内容を記録した尊円法親王の『入木口伝抄』には、「絵詞事」の項目があり、世尊寺家の人々は、絵巻の詞書の書写は能書の職能に準じるものとして、重要視していたことがわかるといえる。彼らは多くの絵詞を手掛けたが、自然な筆勢によらない、意図したような「太線による連綿」をその書法の特徴とすることが指摘される。とくに連綿の下に、変体仮名「利」や平仮名「ひ」「ふ」「む」「れ」を配する場合に比較的多く使われると示されているが、本絵巻の徳川本とこれを踏襲する大谷本には、まさにこの傾向が見られる。とくに変体仮名「利」¹⁹⁾は頻出と言っても過言でないほど多用され、「太線による連綿」をともなっている。徳川本の詞書が一四世紀前半の世尊寺流の手になることは、もはや動かないところであろう。

行尹嫡男の世尊寺家第一三代行忠(一二三二〜八一・実はその兄・有能の子)は、「後三年合戦絵巻」(貞和三・一三四七年制作、東京国立博物館蔵)下巻の詞書の筆者であることが知られるが、延文四年(一二三九)には後光厳天皇(一二三三〜七四)の勅命で、二代將軍足利義詮(一二三〇〜六七)のために「錦の御旗」に揮毫したという。¹⁹⁾足利家歴代將軍による絵巻物制作および蒐集は、近年とみに注目される場所であるが、すでに一四世紀の半ばに、世尊寺家が足利將軍の「御用」を務めていたことにも、留意しておきたい。

いっぽうの徳川本の絵については、『倭錦』や『本朝画図品目』追加ほかで、飛驒守惟久筆と伝えられ、註7の「記録帳」や各箱書もこれに従う。惟久その人の作ではないとしても、惟久筆とされる前述の「後三年合戦絵巻」や、「長谷雄草紙」などとの近似性、すなわち、繊細柔軟で肥瘦のない描線による似絵風の人物表現、画面の静止性などが指摘され、一四世紀前半の制作と考えられている。²¹⁾また、宮次男氏は、惟久筆の伝承がある絵巻は、比叡山と何らかの関係がある内容をもっていると着目する。比叡山に成立していた唱導文芸と合戦絵の深いつながりを宮氏は

念頭に置いているが、この絵巻においても戦乱の世の人々を救いへと導くために厭離穢土・欣求浄土が説かれ、合戦の場にも臨場した時衆僧との関わりも想定される。惟久筆は示唆に富む伝称と注目され、このことについては、後述したいと思う。

詞書の文章は、呼びかけのりでリズムカルであることが指摘され、絵解きで使用された可能性にも触れられる。²²とくに「夢なれば・・とどまらじ」、ついで語尾に「破来頓等」が繰り返されるなど、この傾向は第一段でことさらに顕著である。徳川本は、巻頭の傷みがとくに目立つこと、詞には校合した結果か、訂正や文字の挿入などの後筆も多いことを先述した。布教や教説理解のために使用され続けたことは認めうると思うが、いわゆる「絵解き」に使用されたものであるかどうか、筆者は否定的に感じる。これについても後に触れたいと思う。

しかし、それでは、いったいどのような人々への布教や教説理解のために、この絵巻は制作され、披見されてきたのであろうか。また制作の主体については、どのように考えられるのか。先行研究において、以上のように解明されてきた本絵巻であるが、その制作者や受容層については、これまであまり論じられてはいない。次節では、主に詞書の内容を吟味しつつ、このことについて考えたい。

第二節 時衆の教義と絵詞の相違点

本絵巻について、はじめに、で述べたとおり、山本氏によって委細に詞書の典拠が明らかにされた。つまり本絵巻の詞書は、回国遊行に宗教活動の原点を見出し、「捨聖」に徹して、妻子・所領を捨てて教えを説いて各地を巡った一遍による、時衆の教義を説いたものと解される。

しかし、詞書第三段末尾の左記（詞書対照表に★を付した）については、注意を要すると考える。

(前 略) 形ハ娑婆尔止、まるニ、
尔多利といへとも、本願をうち多のミ堂で
まつ利て、名号越唱は、娑婆越いて堂る人、
娑は凡夫にして、妻子越带多利止も、名号越
唱ハ佛也、この本可尔佛あること奈し、

意訳

一 姿形を変えず、これまでどおりに俗世にとどまるのと
同様の状況であつても、弥陀の本願を頼りとし、
名号を唱えれば、俗世を出離したのに等しい。
娑は凡夫のまま、妻子を帯しているのであつても、名号を
唱えれば仏である。このほかに仏であることはない。

つまり、家族と離別して僧体とならなくとも、元の暮らしのまま、名号さえ唱えれば、仏となれると本絵巻の
詞書は説いている。

いっぽう、『一遍上人語録』卷下四四はよく知られる一節であるが、次のようにある。

念仏の機に三品あり。上根は、妻子を帯し家に在りながら、著せずして往生す。中根は、妻子をすつるといへ
ども、住処と衣食とを帯して、著せずして往生す。下根は、万事を捨離して、往生す。我等は下根のものなれ

ば、一切を捨ずは、定めて臨終に諸事に著して往生をし損ずべきなりと思ふ故に、かくのごとく行ずるなり。よく／＼心に思量すべし。(下略)²³

この記述に従うと、前記の絵詞にいう内容は、最も優れた人間のみに往生可能となる「上根」を示す。しかし一遍は、我等は能力のない「下根」であって、一切を捨てなければ、きつと臨終のときに諸々に執着して往生を仕損じると思うので、このように一切を捨てて行に励むべきであると、説いているのである。いったいなぜ、本絵巻絵詞は宗祖による『一遍上人語録』の記述に背き、「上根」をもってよしとするのであろうか。この絵巻が時衆教団内部による制作ではないことの証左となると考える。

本絵巻の絵には、具体的にこの内容を可視化しているところとえられる部分は見当たらない。しかし、徳川本第一段、大谷本第二段の、不留房とみられる僧が家や妻子を打ち捨て戸外に踊り出る様子は、発心というより、表情は恍惚としていて、足元には破却して打ち捨てられた腰刀や蝙蝠扇が散乱し、惑乱の状況を呈している(31頁図9)。詞書には表れない不留房出家の背景譚を中村ひの氏も想定しているが、²⁴ここには、絵詞が認め記すところの「上根」とも相まって、むしろ家や妻子眷属を捨てて出家することが社会的に許されない、貴族や武家の想いが投影されているのではないだろうか。不留房のように穢土を捨て一心不乱に仏となることはかなわない、「上根」をとることしかない高位上層の信仰者、時衆の徒の想いである。本絵巻はこのような人々を対象に、布教や教説理解をはかるために制作されたものだったと考える。徳川本もかつては現在から推測される以上に濃彩であったと認められ、質の高い顔料や阿弥陀如来には金箔の使用を認める。そして詞書は、天皇や將軍をはじめ貴顕に重用された世尊寺流の書き手によるものである。絵解きにも様々なケースが考えられようが、広く布教のための絵解きに使われるものなら、このような上質のつくりには違和感がある。では、制作主体はどこに求められるのか。

『一遍上人語録』からは、亀山天皇中宮從三位嬉子や、土御門入道前内大臣源通成、あるいは山門横川の真縁上人、興願僧都、鎌倉詫麻の公朝僧正など、多くの上層貴族や僧と一遍が書簡を取り交わしているのがわかる。また、津田徹英氏は、金蓮寺本「遊行上人縁起絵」詞書や、神奈川県立歴史博物館蔵の「一遍上人像」に着賛した可能性が高い久我長通（二二八〇～一三五三）・通相（一三三六～七二）父子が、時衆の外護者であった可能性を示唆している。²⁵ 同様に、青蓮院流の書の祖で、世尊寺家の行房、行尹兄弟から書法を伝授された尊円法親王も金蓮寺本「遊行上人縁起絵」詞書の筆者のひとりであり、同本の巻十の上下巻をはじめ、「遊行上人縁起絵」伝世諸本には、世尊寺流の能筆家の手になる可能性が高いものがみられるという。²⁶ そもそも『一遍聖絵』（国宝、清浄光寺蔵）の外題は世尊寺経尹（二二四七～一三二一以降）が筆を染め、同絵巻の制作に貴顕が関与していることが早くから言及されてきた。本絵巻の制作にも、彼ら時衆の外護者の存在が認められるのではないだろうか。

先述したように、本絵巻徳川本の絵には、飛驒守惟久筆の伝称があり、惟久筆の伝称がある絵巻は、比叡山と何らかの関係がある内容をもっているとみる意見もある。一遍と親交が見られた山門横川の真縁上人の存在は気になるところである。比叡山（山門）と時衆の関係は、同様に園城寺（寺門）との関係も含めて、複雑を極めなかなか明らかになしえないようだが、たとえば四条道場金蓮寺は比叡山の勢力下に在り、従来園城寺文化圏でなされた「遊行上人縁起絵」制作が、金蓮寺本においては山門側が関与するかたちで行われたと、井並林太郎氏は指摘する。²⁷ また同氏は、能筆家として注文に応じるといふことを考慮する必要はあるが、金蓮寺本筆者に尊円法親王の名があることから、比叡山文化圏の勢力拡張に上層貴族のサロングループも交わり、そこには政治的意図もからむことを示唆している。²⁸

時衆が力を蓄えていったこの時代、井並氏は拠点づくりのための数々の絵巻物制作が行われた機運を指摘するが、

本絵巻は、この時衆教団拡張期に、時衆応援団とも称するべき、時衆の外護者としての貴顕、つまり家や家族、家臣を捨ててまでの出家はかなわない彼らの誰か、あるいはそのサロングループが制作の主体となったと考える。そして、時宗と文芸、とくに和歌との観点から、彼らには西行への憧憬があり、自らは西行のように妻子らすべてを捨てて出家できないところを、不留房に仮託したことが想定されるが、これについては今後の課題としたい。

結 び

以上の検討で、第一章においては、現在伝わる「破来頓等絵巻」には二系統あり、ひとつは重要文化財の徳川本から大谷本に連なる系、もうひとつは東博A本と国会図書館本の系であること、そして後者について、国会図書館本は、東博A本がもとにした祐清本とは別の、かつて存在した一本からの転写とみられることを指摘した。徳川本とは異系統の模本の存在は、掛幅説もある徳川本の祖本を考えるうえで、示唆を与えることになるだろう。また、第二章では徳川本を検討し、本絵巻は貴顕を対象に、布教や教説理解をはかるために制作され、その制作主体は時衆教団内部ではなく、時衆の外護者としての貴顕の誰か、あるいはそのサロングループに求められることを提示した。

最後にどうしても不可解である、徳川本においてのちに第三段絵の名号が消されていることに触れておきたい。山本氏はこれについて、元あった「南無阿弥陀仏」の墨書が、いわゆる一遍流の「行の名号」といわれる、「弥」の偏が弓のようにそった時衆で用いられた独特のもの（6頁図3参照）だったので、この書体を嫌がったのちの所有者による仕業とみている。²⁹しかし、名号を消すとは、不遜極まりない行為のように思える。

徳川本には伝世過程のある時期に、最後に後巻紙として付与された別紙に「相傳阿弥」と記されている。阿弥に

よる相伝、つまりある段階からこの絵巻は寄進されるなどして、時衆内部に伝わったのではないだろうか。そこで、『一遍上人語録』巻下二〇には、名号について、次のような記述があることが想起される。

名号は青黄赤白の色にもあらず、長短方円の形にもあらず。有にもあらず無にもあらず。(中略)唯声にまかせてとなふれば、無窮の生死をはなる、言語道断の法なり。

また同四五には、

又云、法照禪師の云、「念即無念、声即無声」と。されば名号は即名号無し。竜樹菩薩は、「為衆說法無名字」といへり。「無名字」とは是名号なり。³⁰

とある。つまり、不遜であつたのではなく、この記述を重んじた宗教的動機によつて名号は消されてしまった。しかし完璧に塗りつぶされたのではなく、擦り落とされた果てにうっすらとその痕跡をとどめるのも、「声にまかせてとなえた」証左と考えておきたい。

註

- 1 徳川美術館本の先行研究には「破来頓等画卷」(『國華』二九一、一九一四年)、文化庁編『解説版 新指定重要文化財』一(絵画一、毎日新聞社、一九八〇年)、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」(『金鯢叢書』一五、一九八八年)、『徳川美術館名品集1 絵巻』(徳川美術館、一九九三年)、山本泰一「破来頓等絵」(『絵巻物総覧』角川書店、一九九五年)、中村ひの「『破来頓等絵巻』をよむ―「不留房」発心と往生の表現―」(『もの』)とイメージを介した文化伝播に関する研究―日本中世の文学・絵巻から―平成一九〇二年度 科学研究費基礎研究(B) 研究成果報告書「千葉大学大学院人文社会科学研究所、二〇一〇年)、同「『破来頓等絵巻』研究―「時宗絵画」及び中世物語絵巻としての文脈から―」(『鹿島美術研究』年報第三〇号別冊、二〇一三年)、同「〈研究ノート〉「破来頓等絵巻」の身体―各段における描写について―」(『千葉大学大学院人文社会科学研究所プロジェクト報告書』二九四、二〇一五年)がある。

- 2 松原茂「狩野晴川院と絵巻」(『ミュージアム』三四四、一九七九年)
- 3 前田氏実は明治二五年(一八九二)に山名貫義の門に入り、三六年に貫義の弟、前田貫業(一八三八?)の養嗣子となる。貫義も貫業も「博物館」(明治三年に帝國博物館、三年に東京帝室博物館となる)で模写をしていた。氏実による「春日権現験記絵巻模本」ほかの模写も、現在の東京国立博物館や宮内庁書陵部図書寮文庫などに残されている。
- 4 『東京国立博物館百年史』(東京国立博物館、一九七三年)によると、帝室博物館は関東大震災を期として、明治以来再び模写事業に力を入れたが、前田氏実は大正一四年(一九二五)にまず「春日権現絵巻」二〇巻を中心になって模写するなど、この時期の絵巻模写事業の中核だったと思われる。
- 5 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」。なお、ここには徳川本一巻の全図が、モノクロ図版で掲載されている。
- 6 前掲註1、中村ひの「『破来頓等絵巻』をよむ―「不留房」発心と往生の表現―」
- 7 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」、および調査時に閲覧した徳川美術館の「記録帳」による。
- 8 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」、中村ひの「『破来頓等絵巻』をよむ―「不留房」発心と往生の表現―」、同「『破来頓等絵巻』研究―「時宗絵画」及び中世物語絵巻としての文脈から―」、同「〈研究ノート〉「破来頓等絵巻」の身体―各段における描写について―」
- 9 前掲註1、中村ひの「『破来頓等絵巻』をよむ―「不留房」発心と往生の表現―」にも、この第二段の詞書が第一段の絵に対応することが指摘されている。
- 10 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」。なお筆者も調査の際に確認した。
- 11 前掲註2、松原茂「『狩野晴川院と絵巻』
- 12 前掲註2、松原茂「『狩野晴川院と絵巻』
- 13 国立国会図書館デジタルコレクションにおいて、一巻の全図を閲覧することができる。
- 14 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」
- 15 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」
- 16 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」
- 17 前掲註1、山本泰一「『破来頓等絵巻』について―時宗の教義の絵画化―」、山本泰一「『破来頓等絵』

- 18 橋本貴朗「南北朝・室町期における世尊寺家の書法継承―絵巻物・古筆切を中心として―」(『鹿島美術研究』年報第三二号別冊、二〇一四年)、同「中世世尊寺家の書法とその周辺―「長門切」―葉の紹介を兼ねて―」(松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院、二〇一五年)
- 19 前掲註18、橋本貴朗「中世世尊寺家の書法とその周辺―「長門切」―葉の紹介を兼ねて―」
- 20 高岸輝「室町絵巻の魔力」(吉川弘文館、二〇〇八年)をはじめ、同氏の研究によるところが大きい。
- 21 宮次男「後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題 下」(『美術研究』二五四、一九六九年)、前掲註1、山本泰一「破来頓等絵巻」について―時宗の教義の絵画化―、同「破来頓等絵」
- 22 前掲註1、山本泰一「破来頓等絵」
- 23 大橋俊雄校注『一遍上人語録 付 播州法語集』(岩波文庫版、一九八五年)によった。
- 24 前掲註1、中村ひの「破来頓等絵巻」をよむ―「不留房」発心と往生の表現―
- 25 津田徹英「神奈川県立歴史博物館蔵 一遍上人像の画讃をめぐって」(『パラゴ―ネ』六、二〇一九年)
- 26 津田徹英「詞書の筆跡からみた金蓮寺本『遊行上人縁起絵』の位相」(『美術研究』四二三、二〇一八年)
- 27 井並林太郎「一遍聖絵と遊行上人縁起絵」(京都国立博物館『国宝―一遍聖絵と時宗の名宝』図録、二〇一九年)
- 28 「研究発表と座談会 一遍聖絵と遊行上人縁起絵」における井並林太郎氏の発言(仏教美術研究上野記念財団『研究報告書』四六、四七頁、二〇二〇年)
- 29 前掲註1、山本泰一「破来頓等絵巻」について―時宗の教義の絵画化―
- 30 註23に同じ

謝辞

本稿成稿には、徳川美術館学芸部吉川美穂氏、同薄田大輔氏、東京国立博物館土屋貴裕氏にお世話になりました。ここに記し、感謝申し上げます。

(大谷大学教授 日本絵画史)

(キーワード) 日本中世絵画史、時衆、模本

破来頓等絵巻 詞書 対照表

詞書の改行の位置は徳川本・大谷本のとおりとし、東博A本と国会図書館本については、実際の改行位置に「」を記した

<p>徳川本・大谷本</p>	<p>東博A本・国会図書館本</p>
<p>*は大谷本には筆写されない</p> <p>〔第一段〕 倩以、多佛出世し給、何我等生* 死乃為凡夫乎、有其由心憂飛* 恒沙能功德を具しな可羅、億□□ 万劫尔輪廻乃古里尔有所事、 萬一心を物尔止、免氣留ゆえ也、 形登心止は不二なる可遊へ尔、こ、路 物尔止、満礼ハ可多知毛又不捨離、 と、ま留所能心もむ奈し氣れ盤、 心を登、むる万境裳ま多無なし、 能留心所留境み那已然堂利、い さ、羅は、万事尔止、満ら持、心よわれ</p>	<p>傍線は東博A本の巻頭欠如部分 「」は東博A本・国会図書館本の改行位置 ■は変体仮名の字母、および字体が徳川本・大谷本と異なる 【】内、徳川本・大谷本にあるが欠失 〱内、徳川本・大谷本に無いが加えられている 〳内、徳川本・大谷本と異なる文言、文字</p> <p>〔第一段〕 倩以、多佛出世し給、何我等生「 死乃為凡夫乎、有其由心憂飛」 恒沙能功德を具しな可羅、億□□ 万劫尔輪廻乃古里尔有所事、「 萬一心を物尔止、免氣留ゆえ也、 形登心止は不二なる可遊へ尔、こ、路」 物尔止、満礼ハ可多ち毛又不捨離、 と、「ま留所能心もむ奈し氣れ盤、 心を登、「むる万境裳ま多無なし、 能留心所」留境み那已然堂利、い さ、羅は、万事^尔と、^まら^〳《須》、心よ^王れ</p>

尔志多可へ、穢土尔はと、まら須志て浄土
 乃門尔踊入なん、何物可われを招
 留、就中、わ札ら越止、むる者は名聞能
 関能戸加多くとち、利養能くる、木
 をさし堂れ盤、有躰乃家尔止、
 満るをや。いさ、羅はと、満らし、
 諸人等よ起名尔毛と、ま羅志、夢
 な礼は有所得尔も登、まらし、夢
 奈礼盤悪能名尔毛不留、夢な礼半
 智惠尔毛止、満らし、夢奈礼ハ愚癡
 尔毛止、まらし、ゆ免奈礼はさと利尔
 裳と、ま羅志、夢な禮盤於ろ可なる
 尔も登、万羅新、遊免奈礼半妻尔も
 止、満ら志、久ひかし奈れ盤子尔毛登、
 まらし、足わ奈、れハ財も家裳奈に
 毛かも、王礼など、免曾破来頓等、こ
 路も、袈裟毛破来頓等、う起身毛
 人裳破来頓、わ可起も於い多るも破
 来頓、上臈毛下賤毛破来頓等、
 本むる毛曾志る裳破来頓、法師、
 飛と利そ破来頓、きた利し時毛獨
 曾破来頓、さる時毛ひと里曾破来
 頓等、者し免裳飛と利曾破来頓、終
 毛ひとりそ破来頓、信謗止も尔破来頓
 等、く川志あ者勢帝破来頓等、無我

尔志多可へ、穢土尔はと、まら須志て浄土
 乃門尔踊入なん、何物可《、》連を招
 留、就中、王連ら越と、むる者は名聞能
 関能戸加多くとち、利養能くる、木
 をさし堂れ者、有躰乃家尔と、
 満るをや。いさ、羅はと、満らし、
 諸人等よ起名尔毛と、ま羅志、夢
 な連は有所得尔も登、まらし、夢
 奈礼盤悪能名尔毛不留、夢な禮者
 智惠尔毛と、満らし、夢な連は愚癡
 尔毛と、まらし、夢な連ハさとり尔
 裳と、満羅志、遊女なれ盤於ろ可なる
 尔も登、まらし、夢な禮者妻にも
 と、満らし、久ひかしなれ者子尔毛登、
 まらし、足わ那なれ者財も家裳な尔
 毛加も、我など、免そ破来頓等、
 衣も袈裟毛破来頓等、う幾身毛
 人裳破来頓等、王可きも老多るも破
 来頓等、上臈毛下賤毛破来頓、
 本むる毛そ志る毛破来頓等、法師、
 飛と利そ破来頓、き多りし時毛獨
 曾破来頓、去時毛獨曾破来
 頓等、者し免裳飛と利曾破来頓、終
 毛ひとりそ破来頓、信謗共尔破来頓
 等、く川志合帝破来頓、無我

尔な里奈ん破来頓等、魔郷

尔は止、満らし破来頓等、か登

なき宋乃者む尔ころふ曾、知識

奈利介留破来頓等、心を者なちて

破来頓や、左右能手越者奈ちて破

来頓や、人尔奈留曾破来頓等、

南無阿弥陀仏尔なれや人々

破来頓等

免子止もや、多可らは我をつ奈く曾と

於もひ志利奈はな尔、止満ら無

一遍聖能哥

いにしへは心乃ま、尔し多可ひぬ

心よいまは王れ尔志た可へ

〔第二段〕

不留房はまことにかしこ介れハ、止、満

里者川へき境界なら須と思し里て、

よ路つの物尔止、まらされハ、佛乃國ニ

い利侍りぬ、船乃ともつ奈越き利帝

尔《はと、満らし》破来頓等、魔郷

尔はと、満らし破来頓ヤ、かト」

なき宋乃者むニころふ曾、知識

那リ」【介留】破来頓ヤ、【心を者なちて

破来頓ヤ、左右能手越者那ちて破

来頓ヤ、人尔奈留曾破来頓等、

南無阿弥陀團尔なれや人【ミ】

破来頓ヤ」

免子ともや、【タ】可らは我を徒那く曾と」

【おもひ志り奈はな尔、と満ら無

一遍聖能哥」

いにしへは心能ま、【に志多可ひ怒】

【こ、ろ】よいまは王れ尔志多可へ」

あら、をこ可満しや、於の礼ら越

夢能【うち】乃、阿多と志ら怒本と

こそあ連、う多はさり怒」遍き

家能犬可や」

破来頓ヤクククク」

〔第二段〕

不留房はまことにかしこ介れハ、止、満

里者川遍き境界なら須と思し里て、

よ路川」の物尔と、まらさ連は、佛乃國ニ

入侍怒、船乃とも徒那越き利天

こ氣はむ可ひの岸尔つく可こ止し
抑う記世尔止、満る人はいつれ裳
返、あと奈き極也、無由者、他乃有
を我有と於もひ、虚偽の境越常
住登思ふ也、され盤佛はかくこ曾我
等をは、者ちし免給へ

於彼三途怖畏中 不見妻子及親戚
車馬財寶属他人 死去無一來相親
唯有黒業常随逐

苦をもて楽登於もひ、夢能中越うつ、止
於毛ひ、永苦をはこのミ、一旦乃多のし
ミ越、満こと可本尔者氣むあひ多、生死
乃夢さ免か堂し、こ乃ゆ衣尔佛
未得真覚恒處夢中故佛説為生死長夜
ある古哥云

者可奈さ越、をなしあ多な留夢能よ尔、
ねぬ越うつ、登、な尔思ふらん
よくくあんしてみよ、迷乃前能是非
は非是、人中能果報は多、一として
実なくしてみ那空也、これをもとむ
留者、多とへは飢多る鹿能霜越水登
あやま利てもと免可多く、口中むなしく
志て、死する可ことし、欲界能六天、三
界四州乃中、已界、有情界、いつれ
乃もの可夢ならさ留、生ある毛の半

こ氣はむ可ひ能岸尔徒く可ことし
抑うき世尔と、満類人はいつ連裳
返、阿と那幾極也、無由者、他乃有
を我有と於もひ、虚偽の境常
住と思ふ也、され盤佛(尔)は加くこ曾我
等をは、者ちし免給へ

於彼三途怖畏中 不見妻子及親戚
車馬財寶属他人 死去無一來相親
唯有黒業常随逐

苦をもて楽登於もひ、夢能中越うつ、と
お无ひ、永苦越者このミ、一旦乃たのし
ミを、満こと可本尔者氣む阿ひ多、生死
乃夢さ免か多し、こ乃ゆえ尔佛
未得真覚恒處夢中故佛説為生死長夜
有古哥云

者可那さ越、をなし阿多な留夢能よに、
祢怒をうつ、登、な尔思ふらん
よくくあんしてみよ、迷乃前能是非
は非是、人中能果報はた、一として
実なく志帝み那空也、是越もとむ
留者、たとへは飢多る鹿能霜を水登
阿やま利てもと免加多く、口中むなしく
して、死する可ことし、欲界能六天、三
界四州乃中、已界、有情界、いつ連
乃もの可夢ならさ留、生阿る毛の半

あ利者つる奈し、相逢ものはかなら須
別離阿里、法として常なる毛の奈し、
来し始毛多、飛と利、去終も多、ひと利
始終日と利ならば、中間能友な尔、かハ
世ん、こ乃い堂つらこと尔、止、満る人
乃てい多らく止者、如斯、妻子諸財寶
身尔縛成て、生死尔止、満利多る
躰をみよ

懸網鳥歎高不飛 含鉤魚愁飢不忍
業能あミルか、利、愛能鉤を布くミ多利、
こ札をい可、な氣可さらん、

〔画中詩〕 (… 徳川本では第一段の画中)

あら、をこ可満しや、於乃礼ら越
夢のうち能、あ多と志らぬ程
こそあれ、う多はさり怒へき

家能犬可や
破来頓ヅクククク

〔第三段〕

これい可、世んく、よしな記財寶妻子ニ
心を止、免て、な可く流来生死乃苦越
う氣んよ利は、かなら須く、心者可利な利
とも、思い川へし、但いま浄土門あり、幸
尔法乃こく厭離世須といふ止も、本願

あ利者つる奈し、相逢ものはかなら須
別離「有」、法として常なる「物那」し、
来し始毛「唯獨」、去終も「唯獨」、
始終「飛」と利なら「者」、中「間能友な尔、か盤」
世ん、こ「能以多」つらこと「に」、と、満る人
「能てい」たらくと者、如斯、妻子諸「財寶」
身「耳」縛成て、生死尔と、満「里」多「利」
躰をみよ

懸網鳥歎高不飛 含鉤魚愁飢不忍
業能あミ「耳」か、「里」、愛能鉤を布くミ多利、
こ「連」をい可、な氣可さらん、

〔第三段〕

古禮「い可、世んく、よしな記財寶妻子に」
心をと、免「天」、な「加」く流来生死「能苦越」
う「け」「無」よ利は、かなら須く、心者可利な「里」
とも、思「以川」遍し、但いま浄土門あり、幸
尔法乃こく「厭離世須といふ」とも、本願

をう羅く登、うち多のミ堂てまつ利て、
つね尔念佛世は曾れそ世尔止、満ら
さる人、念ミ稱名常懺悔乃故也、
但、稱名は一法な利といへとも、又二遍尔
あひ王可る、か多あり、安心具能稱名、安
心乃うへ能稱名ミいま多心耳ある時
を安心といひ、古、ろ伊天、但口稱なる
止こ路を名号登なつく、大経能四十
八願乃中尔、第十八願文越料簡するニ、
これも安心具能十念歟、い可むとな礼ハ
設我得佛と説は仏躰、十方衆生
登説は機、至心登説ハ至誠心、信樂と
説半深心、欲生我國と説盤廻向發
願心、乃至と説は多よ利少尔い堂留
ところ、十念と説盤一乃義、不取正覚と
登説は衆生往生能義、於者利能不取
正覚と者し免能設我得佛と首尾一
尔志て機法一躰な利、得佛ハすて尔
正覚なる、不取正覚は衆生決定往生
乃義越あら者さん多免奈利、善導
こ、越のへ給尔、安心具能稱名をは經
文耳ゆつ利て、至心とも、信樂と毛、欲生
我國とも尺し給者須、多、南無阿弥陀仏
登となふれハ、仏毛正覚な利、我ぶも往
生壽、佛乃正覚なるは我ぶ可往生也、

をう羅くと、うちたのミ堂てまつ利て、
つ年に念佛世、者曾れそ世耳と、満ら
さる人、念ミ稱名常懺悔乃故也、
但、稱名は一法な里といへとも、又二遍尔
あひ王可る、か多あり、安心具能稱名、安
心能うへ乃稱名ミいま多心耳有、時
を安心といひ、古、路伊天、但口稱なる」
ところを名号とな川く、大経能四十
八願」乃中尔、牙拾八願文越料簡春るニ、
これも」安心具能十念歟、い可むとな連は
設我得佛と説は「仏躰、十方衆生
登説は機、至心登説ハ至誠心、信樂と
説半深心、欲生我國と説盤廻向發
願心、乃至と説は「多よ利少尔以堂留
ところ路、十念」と説盤一乃義、不取正覚と
説は衆生」往生能義、於者里能不取
正覚と者し免能」設我得佛と首尾一
尔志て機法一躰」な里、得仏ハ春てに
正覚なる、不取正覚」者衆生決定往生
乃義を阿ら者さん多め也、善導
こ、をのへ給尔、安心具能稱名を」者經
文耳ゆつ利て、至心とも、信樂と毛、欲」生
我國とも尺し給者須、唯南無阿弥陀仏」
登となふれハ、仏毛正覚也、我ぶも往
生須、佛能正覚なるは我ぶ可往生也、

然則、若我成佛、十方衆生、稱我名号
 下至十聲、若不生者、不取正覺、と尺
 給、こゑのな可爾機法一鉢止なる、名鉢
 不二乃こと者利、古乃尺中尔留者歟、
 然則、諸人、諸教能出離耳、耳越止、
 免須、心をもよ世須、貴は多としと於もひ、貴
 から壽は多と可らずと於もひ、善惡越是非する
 事那く、又餘教は志可利、淨土宗な礼ハ
 止て、一流の義尔止、古本利、三心乃具、不
 具越論し、機能者氣ミ、者けまさる越論、
 罪能多少越な氣き、破戒持戒越あら曾
 ひ、智恵乃有無を立し、如此乃万事、名
 号乃本可に、かれ、曾よ氣れ、こ礼古曾よ氣
 れ止者可らひ、論言する事ハ、多とひ淨土能
 測底越き者免、善導能疏尺越横豎無
 碍尔よミ、尺といふ止も、能讚門乃智者、
 思量分別の人な利、凡多、すへ可らく正
 道淨土能二門乃智恵越者奈れ、多、南
 無阿弥陀佛と聲越い多世は、きくこゑ
 は、名号堂のミ多てまつる、西方能阿弥陀
 半佛鉢二^号尔多利といへとも、名す奈
 者ち鉢也、鉢す奈者ち名也、名鉢不二^尔
 志て万法成する越、人法並彰と善導も
 尺し給也、然則、形ハ娑婆尔止、まるミ、
 尔多利といへとも、本願をうち多のミ堂て

★

然則、若「我成佛、十方衆生、稱我名号
 下至十」聲、**いつれ**不生者、不取正覺、と尺
 給、こゑの**中**に機法一鉢止な**へり**、名鉢
 不二**能**「こと者利、古**能**尺中尔留者歟、
 然則、諸人」諸教能出離耳、**耳**を止、
 免須、心をも「よ世須、貴は**た**としと於もひ、貴
 から**春盤た**」と**加ら**須と於もひ、善惡越是非する
 事那く、「又餘教**能**は志可利、淨土宗な礼ハ
 止て、「一流の義尔止、**こ**本利、三心**能**具、不
 具越論し、機能者氣ミ、者けまさる越論、
 罪能多少」**を**な氣幾、破戒持戒越**阿**ら曾
 ひ、**知恵**乃有無を立し、如此**能**万事、名
 号**能**本」可に、**加連**「**こ**曾よ氣れ、こ礼**こ**楚よ氣
 連」止者可ら」ひ、論言する事ハ、多とひ淨土能
 測底「越き者免、善導能疏尺越横豎無
 碍」**導**「**に**讀、尺といふ止も、能讚門乃智者、
 思量」分別**能**人な利、凡**た**、**春**へ可らく正
 道淨土」**乃**二門乃智恵越者奈れ、多、南
 無阿弥陀「佛と聲越い多世は、きくこゑ
 は、名号**た**のミ」**奉**る、西方能阿弥陀
 半佛鉢二**に**尔多利」といへとも、名す**那**
 者ち鉢也、鉢す奈者ち「名也、名鉢不二」
 志**帝**万法成する**を**、人「法並彰と善導も
 尺し給**へ**」也、然則、「形**盤**娑婆**に**止、まるミ、
 尔多利といへとも、本願をうち**た**のミ堂て

★

まつ利て、名号越唱は、娑婆越いて堂る人、
姿は凡夫にして、妻子越帶多利止も、名号越
唱ハ佛也、この本可尔佛あること奈し、

〔第四段〕

名号の本可尔臨終さ多する事奈可連、
名号す奈者ち臨終也、名号の本可尔起
行も奈し、安心毛新、四修五念、名号能
乃ほ可尔なし、堂、目越止ち、掌越あ
者勢、南无阿弥陀佛と止なへ井多らは、
こ乃名号、虚空尔遍満して、正報と奈
里て、寶蓮臺越さ、け、乃至廿五菩薩
聲聞衆とも出現し、教主阿弥陀佛止も
出現し、大光明を者奈ちては機越て
ら須、曾乃日可利、すな者ち名号也、かる可
ゆえ耳善導尺しての多満者く、然弥陀
世尊本發深重誓願以光明名号接化
十方云、依報とあら者る、時ハ、水鳥樹
林とな利て、妙法をさへ徒利、鳧雁鴛鴦
登奈利帝は衣能す曾耳志多可ふ、ないし
寶樹寶池宮殿樓閣止、多可ひ耳映徹
するが、なん曾依報乃光明、赫奕多るをや
鳥能妙法をさへ川る、名号変作の法尔
あら須盤、ナル、よ利て可、かく能ご止くならん
人法並彰故、名阿弥陀仏、こ乃尺満こと

まつ利て、名号越」唱は、娑婆をいて堂る人、
姿ハ凡夫尔して、妻子越帶た利止も、名号を
唱ハ佛也、この本可尔佛あること那し、

〔第四段〕

名号の本可に臨終さ多する事奈可連、
名号す那者ち臨終也、名号の本可に起
行も那し、安心毛新、四修五念、名号乃
乃本可に那し、唯目越とち、掌越阿
者勢、南无阿弥陀仏ととなへ井たら者、
こ乃名号、虚空に遍満して、正報と奈
里て、寶蓮臺越さ、け、乃至廿五菩薩
聲聞衆とも出現し、教主阿弥陀仏とも
出現し、大光明を者奈ちては機越て
ら須、其ひ可利、すなハち名号也、かる可
ゆえに善導尺しての多ま主く、然弥陀
世尊本發深重誓願以光明名号接化
十方方、依報と阿ら者る、時ハ、水鳥樹
林となりて、妙法をさへ徒利、鳧雁鴛鴦
登なりて(妙法を)は衣能す曾に志多可ふ、ないし
寶樹寶池宮殿樓閣と、た可ひに映徹
するが、なん曾依報乃光明、赫奕た類をや
鳥能妙法をさへ川る、名号変作農法尔
阿ら春盤、ナル、よりて可、かく能ことくならん
人法並彰故、名阿弥陀仏(と)、こ乃尺満こと

なる可那、仰て信壽へし、名号の本可耳
余業なしといふ事越、無疑無慮、乗彼願力、
定得往生あへて思量する事な可礼、
南無阿弥陀佛

相傳阿弥

なる可那、仰て信^春へし、名号^能「本可^に」
余業なしといふ事越、無疑無慮、「乗彼^彼」願力、
定得往生^阿へて思量する「事な可礼、
南無阿弥陀^仏」

相傳阿弥

大谷大学博物館蔵「破来頓等絵巻」法量表

計測箇所	法量 (cm)	種別	備考
題箋	縦16.6×横3.5		「破来頓」物語 切箔、金泥による打雲文様か
表紙	縦35.3×横41.3		縹色綾織地雲渦に鳥文
見返し	縦35.2×横40.7		紙本切箔散し
本紙縦	35.2		
第1紙横	44.8	詞	
第2紙横	8.0		
第3紙横	33.7		
第4紙横	33.7		
第5紙横	31.5		
第6紙横	36.4	絵	
第7紙横	25.1		
第8紙横	27.3		
第9紙横	27.5		
第10紙横	27.5		
第11紙横	25.3		
第12紙横	21.0	詞	
第13紙横	29.2		
第14紙横	33.7		
第15紙横	33.7		
第16紙横	33.7		
第17紙横	4.0	絵	
第18紙横	21.1		
第19紙横	24.0		
第20紙横	27.5		
第21紙横	32.2		
第22紙横	23.7	詞	
第23紙横	30.0		
第24紙横	33.7		
第25紙横	33.7		
第26紙横	33.7		
第27紙横	30.5		
第28紙横	5.9		
第29紙横	33.1	絵	
第30紙横	25.2		
第31紙横	27.2		
第32紙横	27.5		
第33紙横	27.4		
第34紙横	23.3	詞	
第35紙横	8.9		
第36紙横	15.0		
第37紙横	33.6		
第38紙横	33.7		
奥	縦35.2×横10.7		
軸端径	2.5		象牙製、印可
軸長	37.3		



图8、大谷本 収納箱



图9、大谷本 第二段 (部分)

東島財寶屬他人 死生一未相親
 唯有世業常隨逐
 昔をもく樂せたり夢れ中候しつて
 心を氷雪を度しつて一旦乃ち
 成歸しつてわづらひしあはれ死
 乃無きんかきこり乃ゆり佛
 未清其死但家夢中候佛説死死後使
 あり古平云
 くらふと候なるやあはれもあはれも
 ねの候しつてなりあやん
 よくあつてふと迷乃前は是非
 是非人申れ果報はつてつて
 冥なくしてこれまへををりむ
 西もく之は飢も麻れま候水也
 而もすれりあはれさく口申むりく
 して死するこり欲界は六天三
 衆心洲乃中已思外有情衆これ
 乃の心衆をもる世生あるそのま
 ありつてふ相違もの候なり候

7



9

組梅名は一往たりといへども又二色に
 ありまろりといへども安心具は梅名あ
 心乃は此梅名といへどもつりある時
 をあはれといへどもあはれく組梅名
 を梅名を名もやたかく大徳は四十
 八歳乃中し第十八歳大徳初開す
 これも安心具は十念候といへども
 致我佛佛と説は化将十方衆生
 せ説は憐れ心せ説は至誠心信衆
 説は徳心欲生我回と説は廻向發
 願心乃と説は毒も少しいへども
 と為十念と説は一乃義不説は心説
 と説は衆生恒生に我わたり此心
 心説といへども致我佛佛と首尾一
 して候候一押なり得公ハハハハ
 三尊見なる不説は心は衆生決意恒生
 乃義候ありといへども心より善導
 して候のへ候は安心具は梅名を及經
 文よりゆりて之の心信衆とて欲生
 衆回も心乃は此梅名を南無阿彌陀佛
 七尊不説は心と心説なり我求は恒

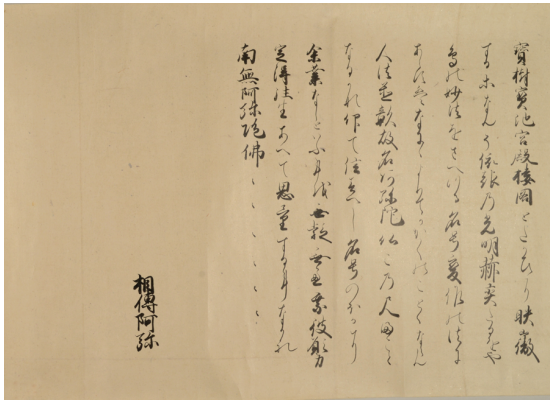
11



13



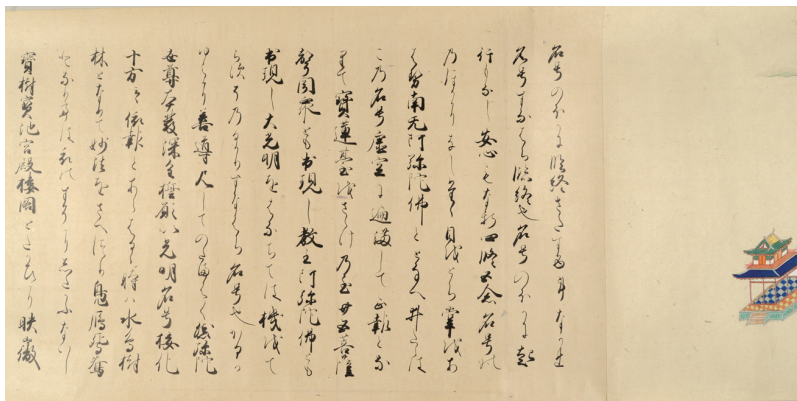
15



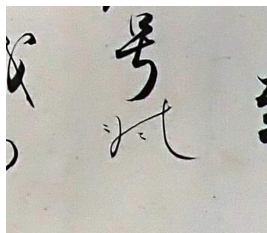
17



14



16



第四段 三行目末尾 拡大図

